

2026 年度 A 日程

国 語

(試験時間 60 分)

注 意 事 項

1. 試験開始の合図があるまで、この冊子の中を見てはいけません。
2. 問題は〔Ⅰ〕の 1 題です。
受験者は、問題〔Ⅰ〕を解答しなさい。
3. この問題冊子は、7 ページあります。
試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページ落丁・乱丁及び解答用紙の汚れ等に気付いた場合は、手を挙げて監督者に知らせなさい。
4. 解答用紙が 1 枚およびメモ用紙が 1 枚あります。
5. 試験終了後、問題冊子とメモ用紙は持ち帰りなさい。

〔I〕

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

判断材料の提供

私たちが言葉を使う目的の一つは情報伝達である。体験を言葉にして伝えることで、それを体験していない人にも「その体験がどのようなか」が伝わるのだ。

たとえば、他人から「あそこに新しくできたラーメン屋は味噌ラーメン専門店だったよ」と聞けば、実際に行かなくても、その店に行けば味噌ラーメンが食べられる、豚骨ラーメンや醤油ラーメンは食べられない、と知ることができる。こうした情報は自分が何を食べるかを判断するための材料となるだろう。それを参考にすることで、ラーメンが食べたいときに「あの店に行ってみよう」と考えるし、ラーメンは食べたいけど味噌ラーメンの気分ではないときには「あの店ではない」と判断できるようになるのだ。

さらに、もしラーメン店について伝えてきた人が味に関して信頼できる人だったら、「おいしかった」「他では味わえないノウ^あコウ^いさ」（あるいは、「おいしくなかった」「どこにでもあるような味だった」といった評価も参考にすることができる。その情報に基づいて、おいしいラーメンが食べたいならそこに行こう（または、あの店はおいしくないからサ^いけよう）と判断できるのだ。

以上のように、言語化された他人の体験について知ること、自分では体験していない物事についての情報が得られ、その情報に基づいて自分の行動を決定することができる。私たちが言葉を使う目的の一つは、このようにして情報を共有し、行動のため^aの材料を増やすことである。

こうした目的は「赤」など幅のある言葉でも果たすことができる。たとえば、「新しく発表されたパソコンの色は赤だった」と聞いたとしよう。それを聞いただけでは、どういった色合いの赤なのかはわからない。だがそれでも、「緑だったら買おうと思っていたけど、赤ならやめとくか」と判断できる。同様に、「あの店のラーメンのスープはさっぱりしている」と聞いたなら、

具体的にどんな「さっぱり」なのかわからなくても、「今日はこつてりしたものを食べたいから別の店に行こう」と決めることができる。言葉によるアラ^うい区別の情報も判断材料になるのだ。

気をつけなければならないのは、言葉の目的は体験の代わりとなることではない、という点である。たとえば、「ノウコウで、コクがあつて、口に入れてすぐコショウのおいが鼻を抜け、後味の風味はすぐに消え……」というように言葉を重ね、特定の料理の味にしか当てはまらない表現ができたでしょう。その表現を耳にしたからといって、実際に味が感じられるわけではない。だが、言葉が体験の代わりにならないことは、言葉の欠点ではない。というのも言葉の役割は、その味を体験しに行くかどうかを決めるうえでの判断材料を与えることだからだ。そして、その役割は先ほどの長い表現で十分果たせるだろう。体験の代わりを言葉に求めるのは、言葉の目的を理解していない筋^ア違いな願望なのである。

体験の明確化

言語化によって得られる利益は、他人から判断材料をもらえるだけではない。これとは別に、言語化^dした本人にとつても利益となるものがある。それは、自分の体験を明確にする助けとなるというものだ。

例として、いま食べているカレーと先週食べたカレーの違いを比べる場合を考えてみよう。しかも、言葉を使わずに比較してみるとする。いま食べているカレーはまさに味がしているが、先週食べたカレーの味はいまはしない。先週のカレーはどうだっただろうか。それを思い出そうとすると、再び口のなかに味が広がってくるわけではない。何かぼんやりとしたイメージは浮かんでくるかもしれないが、非常に頼りないように思われる。いまのカレーと何か違うとはわかって、どう違うのかまではうまく理解できないだろう。さらに、先週食べたカレーと先々週また別の店で食べたカレーの違いとなると、違いはより曖昧^イになってくる。

だが、言葉を使えば区別をつけるのは簡単だ。「いま食べているカレーは、ルーはサラサラして、しびれるような辛さ、ヨーグルトの酸味、玉ねぎの甘味が感じられる」「先週のカレーは、ルーはドロドロで、トマトの酸味が感じられ、最初はそこまで

辛くないのだが A 辛さがあつた」といったように、言葉にすれば違いが明確になる。さまざまな言葉が使えるようになると、その分だけ多くの区別がつけられるようになるのだ。

感じた味や香りを言葉にする作業は、[※]ソムリエを目指す人が読む本ではよく推奨^ウされている。ソムリエはさまざまなワインの味や香りを記憶して区別する必要がある、その能力を養うためには、ワインを飲んだときに感じた香りや味をメモするのが良いそうだ。言葉にすることでさまざまなワインの違いを整理でき、また、メモを見返すことで「あのワインとこのワインが似ていると感じたのはこういう共通点があつたからなのか」といったことも発見できる。自分が感じた味の共通点や相違点を、より明確な^えコンキョから理解できるようになるのだ。

以上のように、体験を言語化することで体験が明確になる。現在体験している味と過去に体験したさまざまな味の違いは、言葉による区別を利用することで明らかになるのだ。逆に、体験を言語化しないと、その体験が他の体験とどう違うのかもうまく理解できない。言語化は体験の特別さを^え奪うものではなく、特定の体験の特別さを際立^エたせてくれるものだと言えるだろう。

(源河亭『美味^{おい}しい』とは何か』による、一部改変)

※ ソムリエ——レストランなどで、客の相談を受けてワインを選定・提供する専門家。

問一 傍線部あゝえのカタカナを漢字に直せ。

問二 傍線部アゝエの漢字の読みを平仮名で書け。

問三 破線部①ゝ④の動詞の活用の種類として適当なものを、次のアゝオのうちからそれぞれ一つずつ選べ。

ア 五段活用 イ 上一段活用 ウ 下一段活用 エ サ行変格活用 オ カ行変格活用

問四 空欄

A

 に入る「影響が残り続ける」という意味の慣用表現として最も適当なものを、次のアゝオのうちから一つ選べ。

ア 鼻を突く イ 舌を巻く ウ 眉を寄せる エ 後を引く オ 先を読む

問五 傍線部a「行動のための材料」として適当なものを、次のアゝオのうちから二つ、選べ。

ア 新しくできたラーメン店は味噌ラーメン専門店だったという情報。

イ ラーメンは食べたいけど味噌ラーメンは食べたくないという気分。

ウ 食べたいのはあの店ではないという判断。

エ 信頼できる人からの「おいしかった」という評価。

オ おいしい店でラーメンを食べたという体験。

問六 傍線部**b**「幅のある言葉」とはどういうことか。「赤」を例に、八〇字以上九〇字以内で具体的に説明せよ。(句読点も字数に含めること。)

問七 傍線部**c**「言葉が体験の代わりにならないことは、言葉の欠点ではない」とあるが、なぜか。本文の表現を用いて、四〇字以上五〇字以内で説明せよ。(句読点も字数に含めること。)

問八 傍線部**d**「言語化した当人にとっても利益となるもの」として適当なものを、次のア～カのうちから三つ、選べ。

ア 今食べているカレーの味についてのさまざまな言葉を覚えることができる。

イ 先日食べたカレーの味を口の中で再現することができる。

ウ 現在食べている味と過去に食べた味の違いを明らかにすることができる。

エ ささまざまな言葉が使えるようになり、その分だけ多くの区別をつけることができる。

オ ささまざまなワインの味の違いを整理でき、味の共通点を発見することができる。

カ 言語化して情報を共有することで、相手との親密さを増すことができる。

問九 傍線部 e「言語化は体験の特別さを奪う」とはここではどのようなことか。最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選べ。

ア 自らの経験した体験を言語化することによって、他者との情報の共有が阻害された結果、個の体験が特別な事象として扱われてしまいがちになること。

イ 信頼できる他者から得られた特別の情報に基づいて行動することによって、自ら判断する機会が奪われ、結果的に思わぬ不利益を招く恐れがあること。

ウ 言葉でいくらうまく表現しても、言葉は体験の代わりにならないので、言葉にすることでかえって体験そのものの特別な感動を損なう恐れがあること。

エ 体験を言語化することは、その体験が特別であればあるほど、奇抜で陳腐な表現になりがちなので、語彙の選択には気を付けるべきであるということ。

オ 言語化された他人の体験について知ることは、その体験の特別さを他者から奪ってしまうことにつながり、他者との関係の悪化を誘引する恐れがあること。

問十 本文の内容として適当なものを、次のア～キのうちから二つ、選べ。

- ア 言葉で上手に表現しても相手に追体験させることはできないので言葉で情報伝達を行うことは難しい。
- イ 言葉を使う目的の一つは、情報を共有することにより、行動の判断材料を増やすことである。
- ウ 体験を言葉で表現することによって、ある体験が他の体験とどう違うかをうまく理解できる。
- エ 言葉は、相手に行動の判断材料を与えることはできるが、自分の記憶を明確にすることはできない。
- オ ささまざまな言葉を使って美味しさを表現することにより、自分の体験を正確に再現できるようになる。
- カ 使える語彙を増やして表現を工夫することで、より正確で詳細な情報を相手に伝えることができる。
- キ 言語化することは体験の明確化につながるが、言語化する難しさを訓練によって克服する必要がある。

問十一 あなたの実体験を例に挙げ、言葉にすることで得られるものについて、三〇〇字以内で述べよ。（句読点も字数に含めること。）

二〇二六年度

一般選抜入試

前期A日程

メモ用紙

国

語

受験番号
